「各世代がつながる地域づくり
～これからの舞鶴版社会教育の仕組み～」概要

第31期舞鶴市社会教育委員会議

本建議に至るまでの背景

地域を取り巻く環境

少子高齢化に伴う人口減少、価値観の多様化などから生じる人のつながりの希薄化、社会的孤立が拡大するなか地域住民の絆、支え合い、関わり合いの重要性が再認識され、地域課題を「地域全体」で考え直していくことがこれまで以上に求められています。

第３０期（任期 H30～R2)建議「人を創り、地域を創造する生涯学習社会の推進」

地域社会を取り巻く環境の変化を受け、住民同士がつながり、関わりながら、心豊かに暮らせる地域社会に少しでも近づけるためには、社会教育を通じた学びを「地域づくり・人づくり」につなげることが必要と考え、目指す地域、目指す人材像を目標に掲げ、ライフステージ毎における育みたい心を重点とし、人材育成と地域社会の創造について示しました。

基本理念：「ゆるやかにつながる地域社会を目指して　～あなたが輝く関心型社会～」

第31期社会教育委員会議研究テーマ

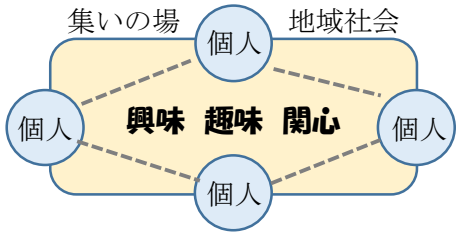
第30期建議で示した人材育成理念を実行していくため、人が学びを得る場「集いの場」に焦点をあてる

「集いの場」を拠点にしたつながりづくり

「集いの場」でのつながりづくり

人が学び、成長していくためには、「集いの場」で広がる人の交流促進が必要

人のつながりは、各世代が地域社会のなかで、他者や物事に関心を持ちながら、関わり続けて創り出されるものと考えます。
つながるためのきっかけは、地縁、血縁などの他にも、興味、趣味、関心などつながり易いもので、ゆるやかに社会とつながりを保ち続けることが大切です。
（小さな社会づくり）



「各世代がつながる地域づくり ～これからの舞鶴版社会教育の仕組み～」概要

第31期舞鶴市社会教育委員会議

集いの場

住民自治という意味においては、これまでからお互いの顔が見える場で対話し、他者とともに支え合いながら、地域社会を創り上げてきました。その拠点となるのは人が集う場であり、その拠点の活性化が地域社会の発展につながると考えます。社会の変化に伴い、集いの場は、その形態も変化していくものですが、人が集う場は、その大きさに関係なく、コミュニティが形成されると考えることから、その空間に、意義やあり方を見出し、共有し、自覚することが大切と考えます。

集いの場のあり方

集いの場とは以下の役割を持ち、人をつなぎ人が育成されていく

1）「結ぶ」個人と社会をつなぐ場

関心を持ち、楽しさや共感を得ながら集うことで、今まで出会うことのなかった多種多様な背景を持った人達が徐々につながり、やがては自分の居場所を見つけられる。

2）「育つ」自己の成長が得られる場

交流、会話を通じて、知恵が生まれ、コミュニケーション、人との関わり方、多様性など様々なことを学び成長につなげ、内面的にも充実感を得ることができる。

3）「創る」自身が当事者になる場

協働などをきっかけに、気が付けば自身がリーダー、フォロワーという当事者としての感覚と意識を持てる場につながり、少しずつ自立した人材が育成される。

共有、自覚 ＝ 集いの場の活性化

集いの場に関係する方々の意識の持ち方

集いの場に携わる人材像は、以下の意識を持ち、集いの場に携わることの大切さを自覚、認識し、集う人達の成長につなげる

1）目的を持ち、思いを持つこと

集う人達が将来どうなってほしいのか、何を伝えたいのかなど、長期的な目的を持ち、思いを持つこと、また、そのことを自身の喜びにすることで、集う人達の成長につなげる。

2）言葉を紡ぎ、縁を築くこと

気持ちよくコミュニケーションを取るなど、集う人達が、嬉しさや楽しさを覚え、自主的に動いていくための原動力につなげるため、小さくても人の縁を紡いでいく。

3）社会と人をつなぎ、育て見守ること

楽しさを覚えた人達がゆるやかに関心を持ち、活動を継続させていくために、ゆっくりと、支え見守りコーディネートし、小さな社会から大きな社会につなげていく。

「各世代がつながる地域づくり
～これからの舞鶴版社会教育の仕組み～」概要

第31期舞鶴市社会教育委員会議

これからの集いの場における仕組みづくり

第３１期社会教育委員会議は、公民館などの優良事例調査における実践者との意見交換、３０代から５０代を対象にした市民アンケート調査の分析などをもとに、今後も、その時に順応した集いの場を沢山創り、継続させ、より活性化させていくための仕組みづくり、あり方について以下のとおり考えるものです。

1. 人と人をつないでいく仕組み

１） 居心地の良い場所をつくる

人の交流を促進させるためには、集いの場での地域住民の様子や活動状況を可視化し、また、積極的にコミュニケーションを取るなど、まずは、誰でも立ち寄りやすく、気軽に日常的な交流を促進していく工夫が必要。

２） 地元を知って皆に伝える

人が興味や関心を持ち、気軽に足を運びたいと思えるためには、参加者の活躍する様子が常に伝わるよう情報を発信していくことが必要。年代に応じたＳＮＳ等を駆使し、またＩＴが苦手な世代には積極的に地域に入り会話により情報を伝え、そこで得られた情報などをＳＮＳ等で更に拡散していくことが必要。

３） 皆が望んでいるものを知る

多様化するニーズに対応するために、住民ニーズを捉えていくこと、また、定期的にアンケート調査等を実施しながら、各世代のニーズや現状、行動把握等、その傾向などを掴みながら、多様な世代を取り込むためのアイディアに生かしていくことが必要。

４） 新しい技術を使う

コロナ禍で顔を合わせたリアルな交流が難しくなっているそういう時にこそ、情報技術を駆使し、オンラインによる交流を実施することで、新たなつながり方を模索していくなど、状況に応じて情報技術を使い分け、人のつながりを継続させていくことが必要。

2. 開かれた集いの場

1） 色んな人と協力する

昨今では、NPOや社会教育団体、高等教育機関、市民活動をする団体等様々な団体が地域課題の解決に取り組んでいる。
その様な団体と積極的に連携・協働し、効果的な手法を取り入れ、時には、集いの場の関係者はその団体をつなげコーディネートすることで、課題解決にあたり相乗効果を得ることが重要。

また、人生１００年時代を迎えようとしている現代では、元気な高齢者、特に７０代世代の活躍が期待されることから、積極的に地域活動に誘い協働していくことが必要。

2） 心が通い合う集いをつくる

これまで培ってきた技術や知識、経験を持つ人、様々な人脈を持つ人、人づくりに情熱を持つ人など、そういう人材を集いの場に配置することで、周りに良い影響を与え、相乗効果により人材資質の向上につなげていくことが必要。また、地域づくりの展開をコーデネートする専門職である「社会教育士」の存在も大きな役割を果たすと言われており、この様な人材を若いうちから育成し配置することで、将来を見据えた地域コミュニティの活性化につなげていくことが重要。

3） 集う人達の特徴を知る

集いの場において、集う人達は、集うことでどの様に成長しているのか、そしてそれがどの様な効果を生じさせているのかを分析することで、集いの場に参画しない人を誘うきっかけにすることが重要。

社会が変化していくなかで、人のニーズは多様化し、情報技術などは進化、発達していきますが、時代に応じたつながりづくりは、そこに携わる人の熱意、想いが人のつながりを紡ぎ、社会教育の力になります。